

# 野鳥だより

—北海道—

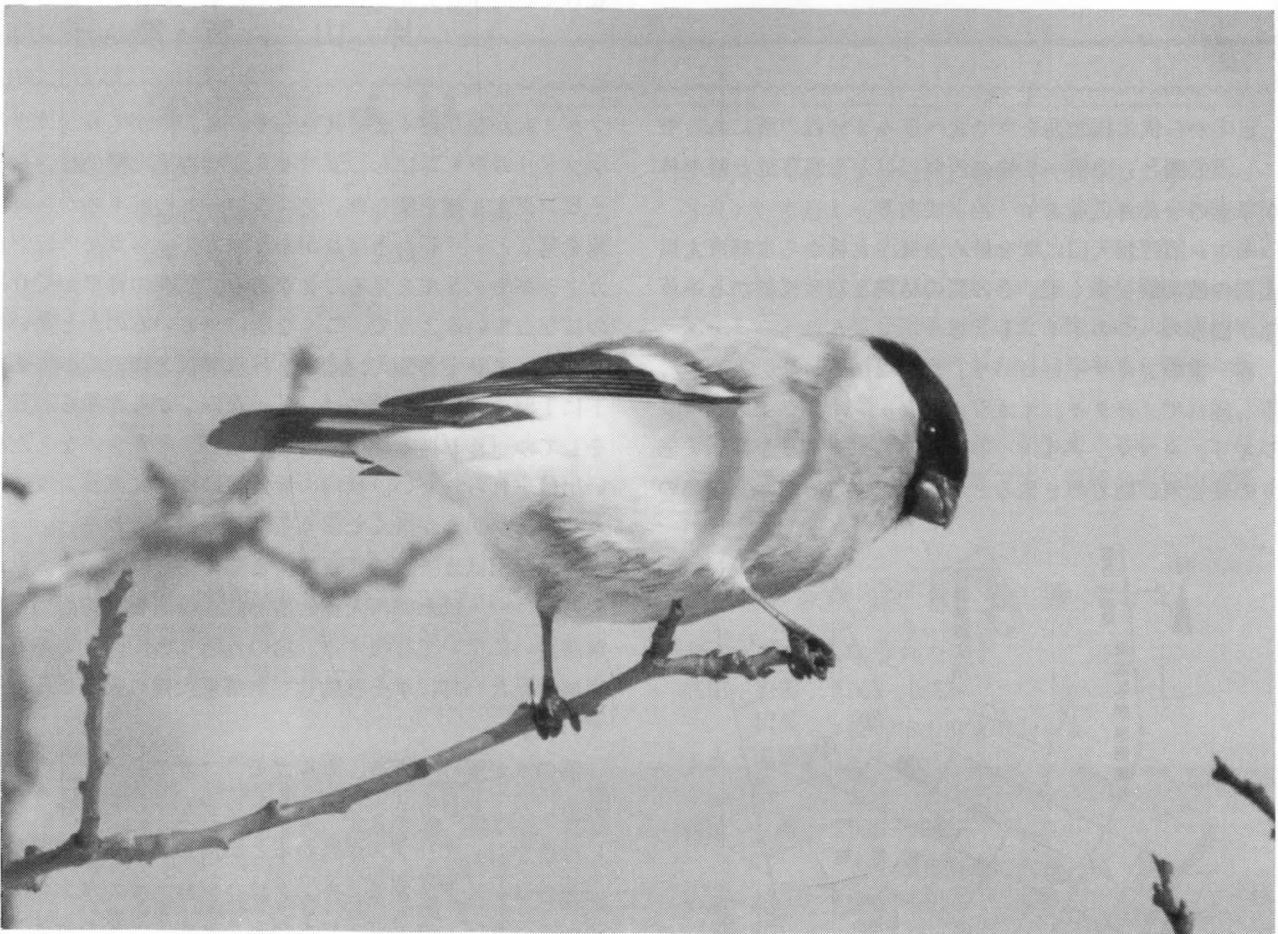
ISSN 0910-2396

第 131 号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成15年3月21日

ベニバラウソ



2003. 2. 19 札幌市円山公園 撮影者 山田 甚一

〒062-0822 札幌市中央区北2条西26丁目1-12



も く じ

私の探鳥地 (45) モエレ沼公園と中沼町	片山 實・慶子 .....	2
サロベツ原野の繁殖期の鳥類相	山田 雅仁 .....	4
ミュビゲラの復活を願って	川辺 百樹 .....	8
「その後のウミネコ」	小杉 和樹 .....	10
北海道における繁殖期のムクドリ	藤巻 裕蔵 .....	14
鳥好きの文学散歩 2 藤沢周平「玄鳥」	高橋 良直 .....	15
根室地方の自然と野鳥 - 新年講演会から -	川崎 慎二 .....	16
探鳥会ほうこく .....		17
鳥民だより .....		19
探鳥会あんない .....		20

私の探鳥地 (45) モエレ沼公園と中沼町

片山 實・慶子

自宅から伏古拓北通を車で北へ進み5分程の所にあるモエレ沼公園と、中沼小学校の西側に広がる雑草地と雑木林が私達の一番身近なフィールドである。

モエレ沼西側入口に車を止め水郷西大橋から水郷東大橋迄右の散策路を歩くが、その間の林間と右手に広がる雑草地が観察の一つのポイントと思う。

春一番のアオサギとヒバリ、雪捨場に群がるカワラヒワ、少し遅れてノビタキ、オオジュリン、アオジ、モズ、コヨシキリ、ノゴマ、アリスイ等、そしてコチドリが砂利まじりの路を飛び回るのを見ると春を実感する。しかし冬鳥の

ツグミもかなり遅くまで共生している。やがてカッコウやツツドリを耳にし、カワセミが橋の下を樹の枝からダイビングする様を楽しむ。テニスコートの駐車場から雑草地を見ると一寸した水溜りがありマガモ、コガモのほかカブシギやタシギを見ることがある。周囲の雑草が隠れみになっているようで、こんな所に来ているのかと驚いてしまう。タシギと云えば昨年9月水郷東大橋近くの堤防の下に1羽のタシギを見つけ、しゃがみながら素知らぬ振りをしてゆっくり進み5~6mまで近づいて見合いをした思い出は忘れられない。秋口の散策では樹間にカッコウの幼鳥やトラツグミが飛んでおりしばしば驚かされる。

モエレ沼はカモ類の観察場所として知られている。私達の観察コースは水郷西大橋と水郷北大橋間を堤防沿いと散策路沿いに歩いて往復する。沼の外回りと内回りである。東側を見たい時は車を移動して水郷東大橋に入りにしている。

沼の水が解けマガモ、カルガモ、コガモ、オナガガモ等の中にハシビロガモを見つけるとなぜかホッとする。秋口には苦手のエクリプスが終わると識別し易くなり上記のカモ達のほかヒドリガモ、キンクロハジロ、オカヨシガモ、運が良ければトモエガモにも会えたりする。また遊泳、休憩、採餌、飛翔の様子をじっくり観察できる。カイツブリ、オオバン、ミコアイサも元気に泳いでいる。カワアイサは10月に大群でやってくるようだ。大げさに云うと沼の大半がカワアイサで埋まってしまう。しかしそれも結氷する迄の間である。その頃になるとオジロワシが現われる。時には数羽のこともあるが薄氷の上でも真冬の雪上でも見られる。堤防側の樹にとまっていることもある。

二つめのフィールドの中沼町は、人の手の余り入らない自然らしさが残っており四季を通して観察できるところか



①～⑤は観察ポイント

ら足繁く通うことになったと思う。観察ポイントは5ヶ所(地図参照)だがほぼ同じ環境で鳥種の偏りは余りない。ポイント近くの道路脇に車を止め周囲を歩きながらの鳥見となる。

1~2月、かんじきを履いて雑木林の周囲や林間を歩くがアトリやウソの群れに出会うと夢中でカメラのシャッターを切ってしまう。出かける度に期待しているベニヒワとの出会いは、昨年一度だけ雪上40cmの一本のオオマツヨイグサの実をついばむハグレと思われる雌一羽だった。しかし今年は1月5日白樺林で雌雄群れになって実をついばむ光景に出くわし実に久方振りのことで良く来てくれたと、しばし見入ってしまった。ヒヨドリ、カケス、シジュウカラ、ハシブトガラ、ゴジュウカラ、アカゲラ、ツグミは出かける度とは云えないもののはば常連である。コリンゴやウメモドキの豊富な赤い実が鳥達を引きつけるらしい。レンジャク類も時折群れで姿を現わす。4月になるとモズやノビタキがやってくる。昨年はモズが4月14日、ノビタキが4月15日の初認だった。5月にはオオジシギのあのけたたましい鳴き声と羽音をたてて飛ぶ姿を目にする。またアオジのさえずりを耳にしたりアカモズとの出会いがあったりする。以前コムクドリが電柱の先端にせっせと餌を運んでいるところを見て驚いたのもこの時期だと思う。夏から秋口になると親子連れのコウライキジが餌をとりながらゆっくり農道を歩いている。その農道をキジロードと名付けたアオジが好む農道をアオジロードと勝手に命名していると雑木林の中から突然アカハラが飛び出し立ち止まってし

まう。ビンズイが同じ場所に2週間程留まってくれたこともあった。カシラダカは9月から10月にかけて、ミヤマホオジロもほぼ同じ頃姿を見せ広葉樹の枝にとまりポーズをとってくれる。この両種はじめじめした路と雑草が好きでよう餌をついばんではびよこびよこ進んで行く。この時期民家近くの樹間を飛び交うルリビタキ、雑草の中を飛び交うベニマシコ、雑木林のコゲラ、ヒガラ、メジロ、シメを目にすることも少なくない。11~12月、エナガが群れになって樹木から樹木へと飛び移る。またマヒワが声もなく白樺に群がっている。オジロワシも樹上に姿を現わす。この時期澄み切った青空をノスリが飛翔する。昨年上下左右に飛び舞う5羽のノスリを見たのは感動の一時だった。ハイタカ、チョウゲンボウにも時々出会うがノスリとの出会いが一番多い。しかし注意して見ることが肝要だ。昨年12月7日ノスリと違って双眼鏡で目をこらしていたが、旋回して間もなく尾羽が扇形となり先端に黒褐色の横帯を確認、ケアシノスリと同定した。

ポイント一巡の時間は鳥達との出会いの多寡にもよるが概ね2時間内外である。私達にとってはくつろげる貴重なフィールドなのだがこの地区の一部をゴミ廃棄場にする話があること、また雑草が徐々に売却されている様で現在の自然態が何時迄保たれるのか先行き不透明なフィールドでもある。

〒007-0870 札幌市東区伏古10条2丁目15-10

## 一泊探鳥会のご案内

これまで道北、道東と一泊探鳥会を開催してまいりましたが、道南へという要望が多数寄せられ、検討の結果、今年度はアカショウビンが見られるかもしれない大沼公園近郊と決まりました。下記の通り行いますので早めにお申し込みください。

月 日	平成15年6月7日(土)・8日(日)
集 合	札幌市北大通りNHK前 午前6時30分 (8日札幌到着は午後6時頃の予定)
探鳥地	大沼公園近郊(途中静狩湿原も予定)
会 費	15,000円
募 集	50名(中型バス 2台)
宿 泊	かんぼの宿大沼
申込先	蒲澤鉄太郎宅 (電話 011-663-9783) E-mail tetutaro@k6.dion.ne.jp

4月1日午前9時より定員になり次第〆切



え 谷口 一芳

## サロベツ原野の繁殖期の鳥類相

山田 雅 仁 (エコウォッチング)

### 1. はじめに

サロベツ原野は、北海道北部のサロベツ川の下流部流域に位置する広大な湿原である。サロベツはアイヌ語で“アシ原にある川”という意味である。ここは1974年に利尻礼文サロベツ国立公園として指定された。

サロベツ原野の標高は約6mと低く平坦であり、縄文時代には地球が温暖化していたために海水面が上昇して海となっていた。寒冷化に向かい始めた今から5000-6000年前には、海水面の後退が始まり、同時に泥炭が堆積し始めた(梅田ほか, 1986)。泥炭は、未分解の植物遺体が堆積したものである。現在その厚さが3-5mなので、1年につきおよそ1mmの割合で泥炭が堆積してきたことになる。サロベツ原野の中心部は、高層湿原でその豊かな水は、降水だけでまかなわれているため貧栄養であり、ミズゴケ類と背丈の低い植生によって覆われている。



ゼンテイカ

サロベツ原野は、第2次世界大戦後の食糧難の時代に農地開発の計画が立てられた。高層湿原の地下水位を低下させるためサロベツ川放水路を掘削し、1965年に完成した。その後地下水位を低下させた高層湿原に盛土を施して、牧草地として利用されるようになった。そのため湿原の面積は、1923年には132.5km<sup>2</sup>あったものが1995年には27.7km<sup>2</sup>となって80%も減少した(富士田, 1997)。放水路が完成してから40年近く経とうとしている現在、その牧草地が盛土の重さによって、下部の泥炭層を圧縮してしまい、地下水位が相対的に高くなるという現象が聞かれるようになった。そのような場所では、再び牧草が育たなくなった。一方残された高層湿原では、地下水位の低下によって、本来高層湿原に生育することのないササの面積が増加するようになった(梅田ほか, 1998)。つまりサロベツ原野では地下水位

を低下させたために、湿原ではササの面積が拡大し、牧草地では牧草が育たなくなり、結果的に両者とも好ましくない状況になってしまった。そこで2002年には、環境省、農林水産省、北海道開発局、豊富町を中心として、農業と湿原の共生を図るための「サロベツ再生構想」の策定が始まった。

### 2. サロベツ原生花園の野鳥

今回の野鳥記録は、2001-02年の4-11月に豊富町のサロベツ原生花園で観察できた種類とその時期について紹介する(表1)。確認できた野鳥は、30種類である。

**2.1 季節変化** いちばん早くやってくる夏鳥は、ヒバリとハクセキレイである。2001年は4月12日にはまだ一面雪に覆われていたが、翌13日に強風が吹いて、地表面が80%ほど現れた。このときすでにヒバリが元気よくさえずっていた。積雪に覆われている間、ヒバリはどのように縄張りを決めて、何を食べて生活しているのだろうか?

5月中旬になるとカッコウ、ツツドリ、下旬になるとセンニュウ属やシマアオジもやってきて、ほぼ全ての夏鳥がそろそろ。上空ではオオジシギが大きな音を立ててディスプレイフライトし、遠くからカッコウ、ツツドリの鳴き声が聞こえ、すぐ近くではシマアオジの美しいさえずりが聞こえてくる。また昼間には確認が難しいエゾセンニュウ、シマセンニュウ、マキノセンニュウも、夜間になるとさえずりを聞くことができる。これらは声が大きい上に、晴れて風の弱い夜間には安定した鉛直気温分布(地表面付近で気温が低く、地表面から離れるにしたがって気温が高くなること)となるため、さえずりが遠くまでよく届く。他の野鳥の睡眠妨害にはならないのだろうか?夜明けも近づくと、オオジシギのディスプレイフライト、ヒバリのさえずり、カッコウ、ツツドリの鳴き声で再びにぎやかになる。このころになると小さくても色彩豊かな湿原植物が目を楽しませてくれるし、高層湿原独特のいい匂いがしてきて、五感を全て使って自然と触れ合う喜びを感じることができる。

8月中旬にもなると、野鳥のさえずりもほとんど聞かれなくなり、確認できる種や個体数も減少する。代わりにキリギリスなどの昆虫の鳴き声が耳につくようになる。湿原全体の景観が茶色くなり、湿原植物の開花も最終段階となると、秋を思わせる。

9月になると早くもヒシクイを確認することができる。警戒心が強くて昼間はなかなか姿を見せないが、夕方になると上空に姿を見せてくれる。



表1 サロベツ原生花園の野鳥観察記録(2001-02年)

	4			5			6			7			8			9			10			11			A	B	繁	備考
	旬	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中				
ウsp.						●	●		●		●	●														F		
アオサギ		●	●			●	●	●	●	●	●	●	●	●											●	F		
ヒシクイ																			●	●	●	●						
コハクチョウ		●																								F		
マガモ		●		●		●	●		●																	道路側溝		
トビ		●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●						●				
オオワシ																	●									2002年9月9日		
ハイロチュウヒ		●				●																						
チュウヒ		●			●		●	●		●		●	●	●		●								●				
クイナ																●										2002年8月27日(幼鳥)		
シギsp.							●																			F		
オオジシギ					●	●	●	●	●	●	●	●	●												●	●		
キジバト																									●			
カッコウ					●	●	●	●	●	●	●	●	●	●												V		
ツツドリ					●	●	●	●	●	●	●	●	●													V		
ハリオアマツバメ								●								●								●		F		
ヒバリ		●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		●	●	●		
ツメナガセキレイ					●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●								●	●		
ハクセキレイ		●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●			●	●		
ノビタキ		●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		●	●	●		
ウグイス					●	●		●	●	●	●	●	●	●	●											V		
エゾセンニュウ						●	●	●	●	●	●	●	●												●	V		
シマセンニュウ						●	●	●	●	●	●	●	●	●										●	●	V		
マキノセンニュウ						●	●	●	●	●	●	●	●												●	V		
コヨシキリ						●	●	●	●	●	●	●	●	●		●									●			
シマアオジ						●	●	●	●	●	●	●	●											●	●	●		
オオジュリン			●	●		●		●	●	●	●	●	●											●	●	●		
カワラヒワ		●		●	●							●	●	●		●	●								●	●		
スズメ						●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●			●	●			
ムクドリ																									●			
ハシボソガラス		●	●			●				●		●												●	●			
ハシブトガラス		●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●				●			
観察日数(2001)		4			1	2	4	4	5	4	3	4	8	5	2								5	3		1	2	
観察日数(2002)		2	2	8	1	6	5	8	6	6		5	3		2	9	2										2	

A: 正富・富士元(1987a, b)より. B: 北海道開発局(1967)より. 繁: 現在原生花園で繁殖している可能性のある種  
 F: 全て上空通過による確認. V: 全て鳴き声による確認

2.2 過去の記録との比較 排水路が完成する前(1961-64年)の記録(北海道開発局, 1967)と、1984-85年の記録(正富・富士元, 1987a, b)を引用して、今回(2001-02年)の記録と比較をおこなった。過去の報告からサロベツ原生花園を抜き出したため、ほぼ同じ場所で比較できた。

まず1961-64年の報告では、6月中旬の5日間だけ調査したことが記載されている。この報告に記録されていなくて、今回記録できた主な種は、マガモ、カッコウ、ツツドリ、クイナ、ツメナガセキレイ、エゾセンニュウ、シマセンニュウ、マキノセンニュウ、コヨシキリ、ウグイス、スズメ、ハシブトガラスである。1984-85年の報告では、1984年

9月から翌2月まで6回、1985年6月に3回、8月に1回観察されている。1961-64年の報告に記録がなくて、1984-85年に記録された主な種は、ツメナガセキレイ、ハクセキレイ、シマセンニュウ、ハシブトガラスである。

マガモは道路側溝で観察された。豊富町役場の話では、道路側溝は1968-71年に工事されたということである。つまり道路側溝ができる前にマガモが記録されていないのは妥当であると考えられる。

カッコウ、ツツドリ、ウグイスの記録は、原生花園から1km以上離れた丸山地区などの森林から聞こえてきた鳴き声の記録である。

ツメナガセキレイは、1977年に初めて記録された種であることが報告されている（正富・富士元，1987b）。

センニュウ属3種に関しては、シマセンニュウが1984-85年に記録されているだけである。過去には原生花園以外で、1961-64年に砂丘林と丸山地区でエゾセンニュウ、西豊富でマキノセンニュウが記録されている。近年原生花園では、灌木のノリウツギの背丈が高くなったと聞くことがある。そのためにエゾセンニュウが確認されるようになった可能性も考えられる。マキノセンニュウに関しては、記載漏れだった可能性も考えられる。

コヨシキリは、道路側溝付近と地盤沈下しつつあるその周辺に生育するヨシ群落で見られる。つまり道路側溝がまだなかった1961-64年にコヨシキリが記録されなかったというのは、妥当であると考えられる。

クイナについても道路側溝とヨシ群落の影響で出現するようになったと考えられる。

スズメは、1階建てのレストハウスやトイレより、おもに2階建てであるビジターセンターの屋根の下などで見られることが多い。このビジターセンターの建物は1987年に開館したので、それ以降に現れるようになった可能性が高い。

またハシボトガラスに関しては、1961-64年の報告には記録されていなかったが、今回の記録では、ハシボトガラスよりもはるかに多く出現した。その原因は不明であるが、観光客との関連も考えられる。

ウsp.、アオサギ、ハイイロチュウヒは、1961-64年にサロベツ原野全体でも記録されなかったが、1984-85年には、サロベツ原野全体としての記録が報告されている。今回はサロベツ原生花園の上空で記録された。

上記のように現在の原生花園付近は、建物や道路側溝が作られたり、人為的な影響によって低層湿原の植生が侵入したりしたため、原生の高層湿原と比較して鳥類相が多様化したと考えられる。このことから、原生の高層湿原を保護することを前提とするならば、必ずしも生物が多様化すればするほどよいということにはならないことがわかる。

### 3. サロベツの野鳥と人との関係

#### 3.1 ハクセキレイの営巢地

あるビジターセンターの職員の車は、いつも

表2 サロベツ原生花園の維管束植物リストとその開花時期（2001-02年）

	月	4		5		6		7		8		9		10		11			
	旬	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
ヤチヤナギ		●	●●																
ワタスゲ		●	●●																
ホロムイツツジ		●	●●●●	●●															
カヤツリグサ sp.			●																
ヒメシャクナゲ			●●●●	●●															
ショウジョウバカマ			●●●●	●●															
タテヤマリンドウ			●●●●	●●●●	●														
ミツバオウレン				●															
ミツガシワ				●	●														
ホロムイチゴ				●	●●														
コツマトリソウ				●	●●●●	●													
センダイハギ				●	●●●●	●													
コバイケイソウ				●	●●●●	●													
ゼンテイカ				●	●●●●	●●													
イソツツジ					●●●●	●													
ヤナギトラノオ					●●	●													
ツルコケモモ					●●	●●													
トキソウ					●●	●●													
カキツバタ					●●	●●													
ヒオウギアヤメ						●													
サワラン						●●													
ノハナショウブ						●●●													
ドクゼリ						●●●●	●●●●												
ハイイヌツゲ						●●													
ホソバノキソチドリ						●●	●												
ミカツキグサ						●●	●●												
エゾチドリ						●●	●●												
ノリウツギ						●●	●●●●	●											
モウセンゴケ						●	●												
タチギボウシ						●	●●												
クサレダマ						●	●●●●												
ヤナギラン						●	●●●●												
ウメバチソウ						●	●●●●	●●											
ナガボシワレモコウ						●	●●●●	●●●●											
イヌゴマ							●●												
ホソバアカバナ							●●												
エゾナミキ							●●												
ヌマガヤ							●●●												
サワギキョウ							●●●●	●											
コガネグク							●●●●	●●●●											
ネジバナ							●●	●●											
ホロムイリンドウ								●●●●	●										
ヨシ								●											
ハンゴンソウ								●											
ミクリゼキシヨウ								●											
ママコノシリヌグイ								●●											
ガンコウラン	?																		
チマキザサ	?																		

同じ場所に駐車している。ある日ペアと思われる2羽のハクセキレイがその車を好奇心たっぷりで眺めているのに気がついた。よく見るとくちばしに巣材をくわえていた。まもなくその巣材をくわえたまま、車の前部のバンパーの下に入っていった。どうやら車に営巣しようとしているらしい。その後もハクセキレイは何回も車に出入りしていた。その3日後、職員は休みだった。いつまで待っても車がやってくるのを待っていた(2002年5月上旬)。

### 3.2 ハシブトガラスその1

著者は、サロベツ原生花園で気象観測をやっている。昼頃にハシブトガラス10羽程が観測場所付近の地面に降りた。そのうちの1羽が10m以内に接近してきた。別に逃げるそぶりもなく、くちばしをカチカチ鳴らしながら低音で「ワラッワラッワラッ」と鳴いていた。このような鳴き方を何回も繰り返した。その意味はわからないが何か主張したそうだった。夕方に再び観測場所に行ってみると、前日設置したばかりの熱流板が地中から引き抜かれていた、前日も熱流板が引き抜かれていたのである。このこととハシブトガラスの行動の因果関係を直接関連づけることはできないが、どうしてもハシブトガラスのいたずらと疑ってしまわざるを得なかった(2002年5月3日)。

### 3.3 ハシブトガラスその2

熱電対を使って温度を測るときには、センサーの片側を基準温度として、日変動の少ない地下20cmに埋めている。ところがそのセンサーが地上に出ているのである。もしも哺乳類の仕業だったら菌型がつくはずである。ところが菌型がついていなかったし、引き抜くためには力も必要なので、またしてもカラスのいたずらと疑ってしまわざるを得なかった(2002年5月25日)。

## 4. サロベツ原生花園の植物

今回の植物記録は、サロベツ原生花園で見られた維管束植物のリストと開花時期を紹介する(表2)。開花時期は2001-02年の記録から作成した。4月下旬から10月上旬までは、何も開花していない時期がないことがわかる。ただ開花時期が年によって約2週間も変化してしまうこともあった。例えばゼンテイカ(エゾカンゾウ)は2001年には6月24日ごろ開花が始まり、2002年には例年になく早く6月12日ごろ開花が始まった。その原因として開花時期(特に6月頃までの)は、光周性よりも春の消雪日とそれ以降の気温の影響が大きいと思われる。また人為的な影響によって高層湿原で見られないような種も見られた。

## 5. サロベツの自然を楽しむ

野鳥観察を中心に考えると、5月下旬から7月中旬が最もよいと思われる(表1)。観察時間は、観光客と昼間の

強風を避けるために、ビジターセンターとレストハウスの営業時間以外がよい。植物を楽しむのであれば、サロベツを代表するゼンテイカが開花している6月中旬から7月上旬が最もよいだろう。またサロベツではさまざまな気象を体験することができる。例えば、晴れて風の強い日には36km離れた利尻富士が雄大に見えるが、逆に見えない日もあること、運がよければ晴れて風が弱い夜間に発生する放射霧を豊徳丘陵から見るとサロベツ原野がまるで湖のように見えること(月明かりがある場合)、もっと運がよければ早朝の放射霧にブロッケン現象が見られるなど自然を大いに楽しむことができる。

## 6. サロベツ原生花園以外で確認できた野鳥

豊徳丘陵(標高50mで森林・牧草地など): トビ、ハイイロチュウヒ、ツツドリ、キジバト、ツバメ、ツグミ、コマドリ、ノビタキ、エゾセンニユウ、センダイムシクイ、ウグイス、カシラダカ、カワラヒワ、ムクドリ

丸山地区(ハンノキ林など): トビ、アカゲラ、アカハラ、ウグイス、エナガ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、ホオアカ、ニューナイスズメ

西豊富地区(牧草地など): キジバト、アカモズ、ベニマシコ、コムクドリ、ムクドリ

最後に論文(正富・富士元, 1987a, b)を紹介していただきました樋口孝城氏に感謝いたします。

### (引用文献)

- 梅田安治・清水雅男・出村昌史. 1986: サロベツ泥炭地の形成過程—泥炭地の形態学的研究(Ⅱ)—. 北海道大学農学部邦文紀要, 15(1): 28-35.
- 梅田安治・辻井達一・井上京・清水雅男・紺野康夫. 1988: サロベツ泥炭地の地下水位とササ—泥炭地の形態学的研究(Ⅲ)—. 北海道大学農学部邦文紀要, 16(1): 70-81.
- 富士田裕子. 1997: 北海道の湿原の現状と問題点. (財)自然保護助成基金 1994・1995年度研究助成報告, 231-237.
- 北海道開発局. 1967: サロベツ総合調査報告書—サロベツ地域開発着手時の実態—. 北海道開発局, 231pp.
- 正富宏之・富士元寿彦. 1987a: 北海道北部サロベツ原野の鳥類相 I. 秋冬の鳥. 専修大学北海道短期大学紀要, 20: 235-251.
- 正富宏之・富士元寿彦. 1987b: 北海道北部サロベツ原野の鳥類相 II. 繁殖期の鳥. 専修大学北海道短期大学紀要, 20: 253-280.

〒065-0015 札幌市東区北15条東4丁目10-2

## ミュビゲラの復活を願って

川 辺 百 樹

### どこで確認されているか

北海道でミュビゲラが発見されたのは60年前のことである。風倒木に発生した昆虫を調査するため、十勝三股を訪れた井上元則氏と五十嵐文吉氏によって、ミュビゲラは発見された。1942年9月19日、十勝三股駅から北へ900mほど離れた15の沢で、アカエゾマツの枯木にとまっているキツツキを五十嵐さんが発見し、井上さんが銃で捕獲した。それがミュビゲラだったのだ。

井上氏は11月と12月にも十勝三股を訪れ3羽のミュビゲラを捕獲した。井上氏の捕獲したミュビゲラは、今も山階鳥類研究所に保存されている。それから14年後の1956年6月7日、十勝三股の伐採現場でミュビゲラの幼鳥3羽が保護された。この経緯が記録に残されていないので詳しいことは分からないが、営巣木を支障木として伐った際に発見したのであろう。この幼鳥は北大植物園の博物館に移され飼育された。はく製が北大博物館に保存されている。

その後1960年にニベソツ山の中腹で阿部学さんらによって確認され、1962年に十勝三股から西へ30km程離れた旭岳の中腹で柳沢紀夫さんによって目撃された。そして、1988年9月1日にニベソツ山の中腹で確認されたのを最後にミュビゲラの生息情報は途絶えている。

### なぜ十勝三股か

ミュビゲラは旭岳の中腹で観察されているものの、圧倒的に十勝三股とその周辺での確認例が多い。それは単なる偶然なのだろうか。それとも十勝三股にはミュビゲラを引きつける何かがあるのだろうか。



図1. エゾマツ林地帯

ミュビゲラ *Picoides tridactylus* はユーラシア大陸の高緯度地域に広がる北方針葉樹林帯(タイガ)と中緯度の山岳針葉樹林帯に分布する。いわば北方針葉樹林のキツツキである。北ヨーロッパでの調査によると、ヨーロッパトウヒの森林を好むことが知られている。

北海道に生育するトウヒ属はエゾマツとアカエゾマツである。北海道で最も普通に見られる針葉樹であるトドマツはモミ属である。トドマツはすべすべとした厚い樹皮を持ち、エゾマツとアカエゾマツは鱗片状の樹皮をもつ。鱗片はエゾマツのほうがアカエゾマツよりも小さい。

何らかの事情で樹勢が衰えると、これらの樹木の樹皮下には穿孔性昆虫が住みつくようになる。エゾマツの鱗片状の樹皮は、ミュビゲラでも剥がすことができるのだが、トドマツの樹皮には嘴が立たない。つまり、エゾマツはミュビゲラの採餌木になりえるが、トドマツはそうではないということである。北海道には針葉樹の生育する森林が各地にある。しかしエゾマツが優占する針葉樹林は、限られている。北海道で一番大きなまとまりをもつエゾマツ林地帯は大雪山系にある(図1)。

これが北海道では大雪山系でのみミュビゲラが確認された理由だと、私は考えている。しかし、大雪山系のなかでもなぜ十勝三股なのかについては、「大雪山系のエゾマツ林地帯のほぼ中央に位置しているからかな」とお茶をにごしている。今後、北海道の各地域の針葉樹林の性質の違いが解明されると、ミュビゲラと十勝三股の関係がうまく説明できるようになるかもしれない。

### なぜ最近見られないのか

もう14年ほど北海道でのミュビゲラの確認はない。なぜ近年ミュビゲラは確認されないのだろうか、絶滅してしまったのだろうか。

この問題を考えるには大雪山系の針葉樹林のしくみを知らなければならない。ここでは音更川上流域の針葉樹林で行なわれた調査結果から説明しよう。

標高1100mの針葉樹の原生林に一辺40mの正方形の調査地が設定され、この中の胸高直径5cm以上の樹木のサイズと樹齢などが調べられた。その結果からは次のようなことがわかった(図2)。

- 1) エゾマツやアカエゾマツの数は多くない。しかし長寿で大きな木となる。
- 2) トドマツの数は多い。しかしエゾマツやアカエゾマツ程大きくはならない。



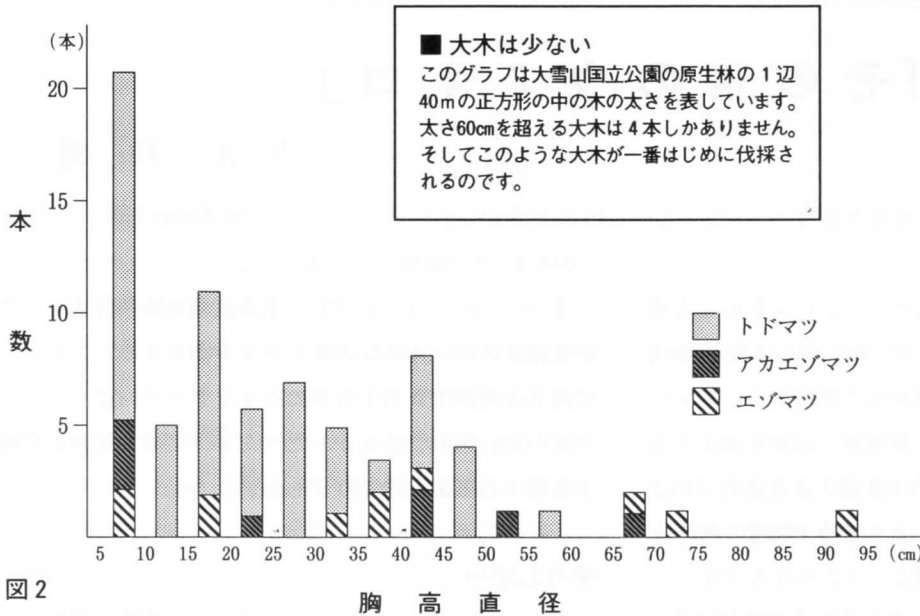


図2

- 3) エゾマツやアカエゾマツは樹齢が400年以上にもなるが、トドマツの樹齢は半分の200年くらいである。
- 4) この林分の蓄積量は1ha当りに換算すると440m<sup>3</sup>である。

かつて大雪山系には、このような森林が各地にあったと考えてよい。伐採が入ると、いの一に伐られるのがエゾマツやアカエゾマツの大径木であった。それはトドマツよりも材質が良く、高値で売れるからである。音更川上流域では100年程前から伐採が行われてきた。かつては無尽蔵と形容された大雪山系の森林も、現在は原生状態の半分にも満たない蓄積量になった。資源が底をつき、麓の町からは営林署も木工場も姿を消した。つまり持続的な資源利用が行われなかったのである。

略奪的伐採は、このようにミユビゲラの採餌木になる可能性があるエゾマツを狙い撃ちにしたのである。分布域の辺縁部に生息し小さな個体群である北海道のミユビゲラにとって、これは大きなダメージを与えた。私はこのように考えている。

いかに保護するか

ミユビゲラの生存にとってエゾマツの存在が重要な意味をもつ。そこでミユビゲラ保護のため、大雪山系におけるエゾマツの伐採を直ちに停止することを提案する。これはそれ程難しいことではない。なぜなら大雪山系はほぼ国立公園に含まれるからである。そもそも国立公園で半ば自由に森林伐採ができるということが世界的にみて異常なのだ。

それから強風による風倒木が発生しても無闇に処理しないことを提案する。これまではキク

イムシの大発生につながるとして、強風で風倒木がでると速やかに林外に運び出し、害虫駆除と称して農薬まで散布してきた。しかし風倒木はキツキ類の採餌木として有用であるし、農薬が昆虫食のミユビゲラに与える影響は言うまでもない。われわれは、水俣病から生物濃縮の恐怖を学んだはずである。したがって、風倒木を運び出すのは止め、農薬の散布もしてはならない。

以上はいわば対処療法である。根本的な保護対策は、伐採によって傷つけられた森林を本来の森林に戻すことであ

る。商業伐採を止め自然の営みに委ねることが基本だと思う。数百年の時間単位でみれば、森林は本来の姿に復帰するにちがいない。しかし人間が過度に攪乱した場所、例えば土場跡や林道などは、人間がパイオニアツリー（ヤナギ類など）を移植し、遷移の進行を促すことが行われてもいまいだろう。ただし、せつかに出所のわからないエゾマツやアカエゾマツを植えることをしてはならない。遺伝子汚染の問題が発生するからだ。

このような考えから、仲間とミユビゲラの復活を願って三国峠の下の土場跡で自然の力を引出す森林再生に取り組んでいる。関心のある方はぜひ参加していただきたい。(附記 2002年に刊行されたHandbook of the birds of the world. Vol. 7によると北米大陸のものはユーラシア大陸のものとは別種 *P. dorsalis* とされている。)

〒080-1403 河東郡上士幌町字糠平



## 「その後のウミネコ」

小杉和樹

あれから…

「野鳥だより第115号」で話した、ウミネコをめぐる幾つかのことを憶えているでしょうか?あれから4年、ウミネコが急激に利尻島で増加するといった状況になってから、15年の歳月が経ちました。でも、根本的には何も変わらないまま、今年もまたウミネコの渡来を迎えようとしています。立春を過ぎて、春を待つ思いと、そうではない思いとが交錯する日々を過ごしています。

1999年、北海道宗谷支庁は「海鳥と共生する地域づくり事業」を開始しました。事業は「ウミネコ等」の生息数や生態などの基礎的なデータ収集、被害の防止や軽減のための方策について、幅広い観点で検討するために、地元住民や学識経験者などで組織された「ウミネコ等被害対策検討委員会」を中心に進められました。

この事業により、コロニーの基礎的な調査やウミネコの生態が研究され、被害対策ではウミネコの飛行コースに大きなバルーンを設置して漁業施設や民家を迂回させたり、コロニー内に杭等を格子状に設置し、コロニーへの定着を妨害するなどの試みも行い、効果の有無等を確認したりもしました。更には、エコツアーの概念を基本に「ウミネコツアー」と称した自然観察ツアーを企画し、島外の方にもウミネコのことやウミネコをめぐる状況を認識していただきました。ただし、2001年までは暫定的な措置として、

1,000羽の成鳥駆除も行うなどしました。

また、この委員会とは別に北海道環境科学研究センターが北海道内のウミネコの生息状況を調査するとともに、利尻島と天売島で成鳥を対象にウイングタグによるマーキングを行い、余りに少なかったウミネコに関する様々な情報が蓄積されるようになりました。

そうして…

幾つかのコロニーへの定着を妨害する事業の効果によるものか、カラスなどの捕食による要因なのか、はっきりしないものの2001年からはコロニー全体が北側へ移動しました。行政区域としては利尻町から利尻富士町へとかわり、生活環境被害が大きいといわれた栄浜地区にはコロニーが形成されなくなりました。幸い、移動先は民家が少なく生活環境の被害は大きなものではなく、北海道も一応の成果は得られたとの判断もあって、事業は2002年3月をもって終了し、今後は地元(利尻町、利尻富士町)が中心となって協議会を組織し、調査、被害対策を進めていくことになりました。しかし、現実的にも被害が減少したことから、漁業者や住民からも積極的な被害対策を求める声が少なくなったため、この協議会は、まだ組織されないままとなっています。ただし、北海道の事業が終わったにしても、コロニーのモニタリングは不可欠ですので、2002年からは北

### ウミネココロニー



利尻島



枝幸町 目梨泊

海道宗谷支庁と日本野鳥の会道北支部の協同でコロニーの概況調査を行っています。

現在のコロニーは、最初の地区からおおよそ2 kmほど北側にある利尻富士町のポロフンベ地区で、島内を環状する道路を境界として海岸側に形成されています。1999年から2002年までの推移をみると、1999年までは初期からの場所で、幾つかの小コロニーが点在していたせいもあり、面積は最大の92,200㎡を記録していますが、羽数は20,600羽でした。2000年はコロニーが新たな場所へ半分程度移動し、面積は縮小して76,913㎡でしたが、羽数は22,496羽と微増しました。2001年には、コロニーが現在の地区に全て集中したものの面積は82,045㎡、羽数23,026羽と、どちらも微増でした。しかし、2002年になると、面積は微増の87,660㎡ですが、羽数では47,471羽と前年の2倍以上の増加となりました。

このように、コロニーは確かに移動し、人間との軋轢はなくなったようですが、コロニーの移動先が、利尻空港ヘグーンと近づき、利尻・千歳間のジェット機就航時から懸念されていた「バードストライク」の危険が一層高まることになりました。これまでも、滑走路上のウミネコを爆竹や車で追い払うということを何度もしているとのことですが、実際2002年には、離陸直前の滑走路上にウミネコが降り、離陸のやり直しが一度あったとのことで、パイロットからもその危険性が指摘され、空港構内での有害駆除が検討されているとも聞きます。

更に、この地区の環境は、島の北西部に特有の溶岩流が露出する海岸草原で、付近には同様の環境が広がっており、コロニーを形成するには好条件で、更に拡大するのは間違いないでしょう。そうした懸念があって、前述の協議会も設立に向けて動き出したとのことで、今春から「バードス

トライク」の防止やコロニーの拡大を防ぐ措置をとることになると思います。

しかし、そうしたコロニーへの混乱や妨害圧は、ウミネコを以前の場所に戻す危険性が十分に予想されるのです。つまり、ウミネコをめぐる問題(?)は、ふりだしに戻ってしまうことになります。拡大するコロニーと増加するウミネコをめぐる問題は、ちっとも解決してはいないのです。

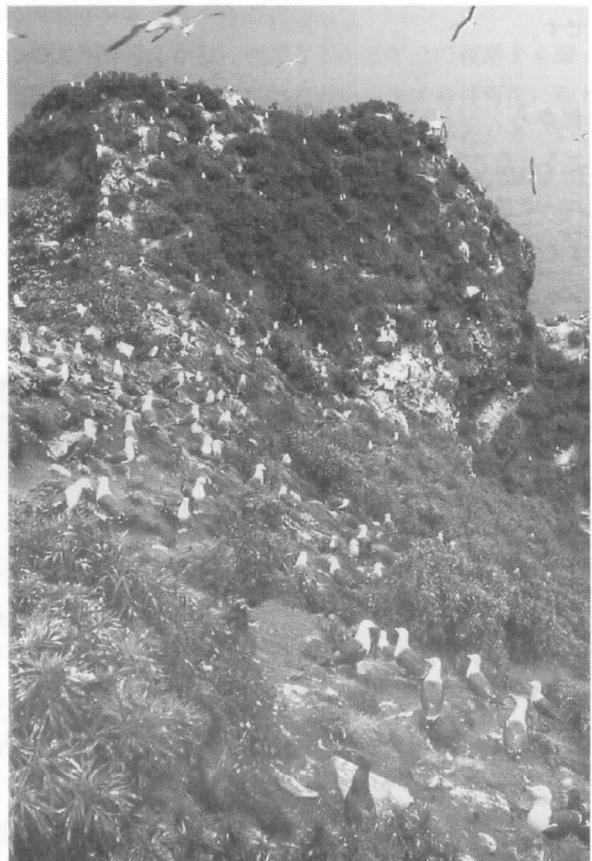
### 他のところは？

一方、北海道内の代表的なコロニーも、比較的变化のない天売島を除き、枝幸町目梨泊と奥尻島では、規模や飛来羽数、環境も毎年変化していますし、道東のモユルリ島での突然の形成と消滅や知床半島の小規模コロニーの形成なども考えあわせると、北海道全体で変化しているということになるでしょうか。

とりわけ、変化が大きいのは枝幸町北部の漁港の防波堤に続いている目梨泊コロニーで、これまでもキタキツネがコロニーに侵入することから、度々繁殖できないことがありました。2002年には、7月2日時点で親鳥はコロニーにまだ定着しているものの、卵や雛は全く確認されませんでした。抱卵時期から、キタキツネがコロニーに侵入してい



奥尻島



天売島観音崎

るのが観察され、廻りにはおびただしいウミネコ成鳥の羽が散乱しており、捕食にあったのは確かだと思いました。枝幸町目梨泊コロニーにおける繁殖の失敗が、他地区のコロニーに影響を与えるのではないかと危惧しているところ

です。奥尻島のコロニーは、南西沖地震の前までは北部にあったものが、現在は南部の青苗に近接する富里地区の海岸に小規模形成されています。これまで、羽数や規模は調査していませんが、年々規模は拡大し、今後も拡大していくように思えます。しかし、このコロニーは道路脇の海岸沿いにあり、コロニー形成に適した海岸線の延長は短く、富里地区が飽和状態になった場合、島内に分散するのではないかも思われ、今後も、継続したモニタリングが必要だと思えます。また、2002年の調査時には、カラス7羽がコロニー外側部分の捨て土斜面に観察され、雛の隠れ場所が少ないために相当数捕食されている可能性があり、まだまだ不安定な状態といえます。

さらに、コロニーの状況ではありませんが、地元の稲作をしながら、土木作業員をされている方の話ではコロニー近くには水田があり、ウミネコに稲を倒されるなどの被害があって、増えるとその被害が拡大するのではと心配されていました。利尻と同じ道を歩くことのないよう祈るばかりです。

### これから

こうしたことから、1998年からは、これら4地区のコロニーで長期間にわたる移動経路やコロニー間の移動を観察するために、雛または若鳥の脚にプラスチック製のカラーリングを装着するマーキングを行っています。これまで、実に多くの方から観察情報をいただき、越冬地の確認や移動の一端が新知見として得られています。そして、繁殖可能な年齢になった個体が、その個体の生まれたコロニー、または天売コロニーで利尻産個体、枝幸コロニーで天売産個体、利尻コロニーで枝幸産個体が記録され、各コロニーを確実に行き来し、繁殖地を移動していることが明確になりました。ただし、奥尻島産に関しては1年遅れの調査開始となったことが影響しているのか、2002年までは他地区コロニーでの記録はありませんが、2002年5月に天売島でウイングタグ装着された個体が、奥尻島コロニーで同年7月の調査時に観察されました。

今後はこれまでも繰り返し話していることですが、道北地方のコロニーだけではなく、北海道全体のコロニーのモ

ニタリングを行い、北海道全体でウミネコを捉える必要があると思っています。そうすることにより、やがては極東地域全体におけるウミネコの全容が見えてくるものと思います。

最後に、これまでに、多くの方々に協力していただいていますマーキング調査の経過として観察地点だけですが掲載し、協力のお礼に代えさせていただきます。

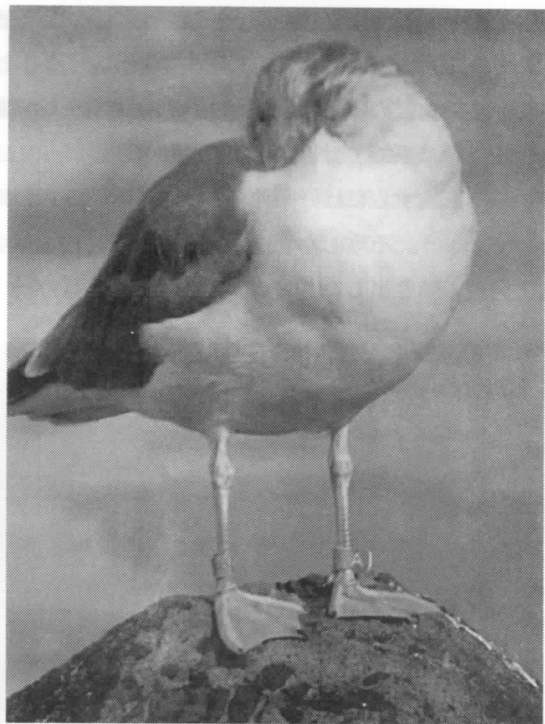
※カラーリング個体の観察記録は以下の方より提供していただいているものです。(敬称略)

宇仁義和(斜里町)、井関謙一(軽井沢市)、長雄一(札幌市)、久保清司(浦幌町)、倉橋義弘(岡崎市)、今野怜(帯広市)、佐藤ひろみ(札幌市)、佐藤文彦(小笠原村)、杉村直樹(稚内市)、芹澤裕二(釧路市)、野呂一則(浦幌町)、花田行博(北見市)、彦坂清子(大阪市)、村山良子(枝幸町)、門馬真彦(斜里町)。

※記録の収集及び広報を以下の関係機関にも協力していただいています。

山階鳥類研究所標識調査室(我孫子市)、北海道環境科学研究センター(札幌市)。

〒097-0401 利尻郡利尻町沓形字富士見町



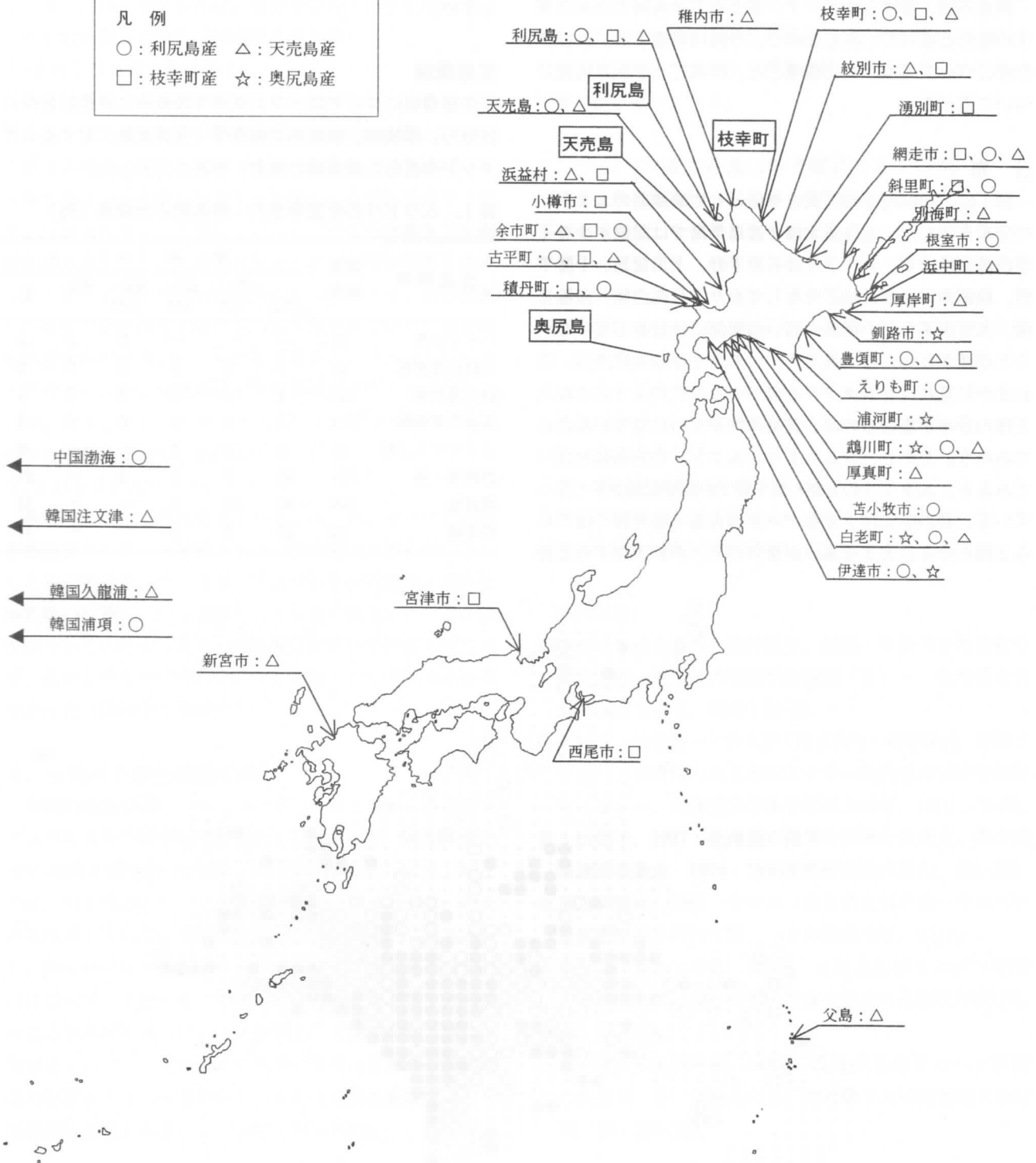
2000年11月12日 余市町にて撮影  
赤色足輪「A」装着個体(1998年利尻島生まれ)  
(写真 佐藤ひろみ)



ウミネコの移動図 (2003年1月現在)

この図は、1998年から北海道利尻島、天売島、奥尻島、枝幸町の4箇所のコロニーでカラーリングを装着して巣立ちしたウミネコが観察された地域を図示したものです。

- 凡例
- ：利尻島産 △：天売島産
  - ：枝幸町産 ☆：奥尻島産



# 北海道における繁殖期のムクドリの分布

藤 巻 裕 蔵

野鳥だより130号でコムクドリの分布について紹介したが、今回はそれにつづいてムクドリの分布である。

調査方法、使用したデータ、まとめ方は前回のコムクドリの場合とまったく同じなので、今回は省略する。最初に分布について述べ、次に環境ごと、標高ごとの生息状況について述べる。

## 分 布

図1に、10km四方の区画を単位として繁殖期のムクドリの分布を示した。北海道北部と渡島半島では記録が少なく空白部が多いが、ムクドリは石狩平野、上川盆地、十勝平野、根釧地方など低地に分布しており、日高山脈、白糠丘陵、大雪山系などの標高の高い山間部には分布していないことが図からわかるであろう。このような分布状況は、おおまかに見ればコムクドリと似ている。このようにこれら2種の分布が重なるのは、営巣環境が互いに似ているためであろう。しかし、コムクドリとムクドリの分布図を比べてみると、ムクドリの方が石狩平野での観察記録が多くなっている。私の手元に十分なデータのある十勝平野ではこれら2種の分布に大きな違いがないので、石狩平野での2種

の分布状況の違いが、実情を反映しているのか、石狩平野における観察がまだ不十分なためなのか、理由ははっきりしない。

## 生息環境

生息環境については、コムクドリの場合と同様に8つに区分し、環境別、標高別に出現率（全調査数に対するムクドリが出現した調査路の割合）を表1に示した。

表1. ムクドリの生息環境別・標高別の出現率（%）

生息環境	調査路数	標 高 ( m )				計	
		-200	201-400	401-600	601-800		
ハイマツ林	11	—	—	—	0	0	0
常緑針葉樹林	11	0	0	0	0	0	0
針広混交林	123	4	0	0	0	0	1
落葉広葉樹林	124	5	0	0	0	0	2
カラマツ人工林	24	0	0	0	—	—	0
農耕地・林	184	30	7	0	0	—	23
農耕地	189	36	23	0	—	—	33
住宅地	24	19	0	0	—	—	17



図1. 北海道における繁殖期のムクドリの分布  
 一つの丸は約10km四方の区画を示し、1/25,000地形図に相当する。  
 ●=生息が確認された。○=調査したが、観察されなかった。・=未調査の区画。

森林でムクドリが記録されたのは、針広混交林と落葉広葉樹林だけで、出現率はそれぞれ1、2%と非常に低かった。出現率が比較的高かったのは、農耕地・林と農耕地で、それぞれ23、33%、それに次いで住宅地で17%であった。このような生息状況はコムクドリとよく似ており、この結果からムクドリは「森林の鳥」とはいいがたい。ただ、農耕地・林と農耕地でこれら2種の出現率を比べると、農耕地・林ではコムクドリ17%、ムクドリ23%で有意な差はなかったのに、農耕地ではコムクドリ22%、ムクドリ33%で後者の方で有意に高かった。これまでに行われた他の調査でも、ムクドリは林のない農耕地でもよく観察され、主要種になることもあるのに、コムクドリは水田地帯や林のない農耕地にはほとんど生息しておらず、今回の結果と同様のことが知られている。このような生息状況の違いは、ムクドリが畑や牧草地のような地上でもよく採餌するのに対し、コムクドリはおもに樹上で採餌するため、林のない農

耕地にはほとんど飛来しないためであろう。

標高別にみると、ムクドリが観察されたいずれの環境も400m以下である。この点、コムクドリは標高401~600mの農耕地・林でも14%の調査路で観察されており、ムクドリの方がより低いところに生息していると言えるだろう。

ムクドリとコムクドリの分布はよく似ているが、ムクドリの方が林のない農耕地でも生息することやより低い標高に生息するという違いがあった。しかし、2種とも樹洞に営巣する習性もちながら森林にはほとんど生息しないという共通点をもっている。前回コムクドリのときにも指摘したが、繁殖期におけるこれら2種の生息条件として、農耕地内の残存林や公園などで樹洞のあるような大木の存在が非常に重要である。

〒072-0005 美唄市東4条北2丁目6-1

## 鳥好きの文学散歩 2

### 藤沢周平「玄鳥」

高橋良直

平成9年に亡くなられた作家藤沢周平氏に「玄鳥」という短編小説がある(文春文庫所収)。「げんちょう」と読み、ツバメのことである。

舞台は江戸時代の武家屋敷で、主人に従順な妻女目の通して物語が展開する。一度追い払ったツバメがまた戻ってきて門の軒下に巣作りをするというところから小説が始まる。

ツバメは農作物の害虫を食べてくれることから、日本では古くから特に農家の人には大切にされてきた。本州各地には、ツバメが巣をかける家は繁盛する、あるいは縁起がよいという言い伝え、ことわざが残っているようである。しかし、この家の主の考えは「家の門は城からの使者もくぐれば上役がくぐることもある場所である。つばめなどを住ませるべきではない」というもので、巣をこわせとにべもなくいう。

妻女は、先日巣を取り外した際「鳴きかわしながら屋敷の上を飛び回る親つばめの声は、耳をふさぎたいほどに切なく聞こえたのをおぼえて」いて、「もどって来なければよかったのに……」と思い、「巣をとりのぞかなければならないことを考えて心を痛めるのである。このあたりの心理描写は繊細で、身につまされる思いがする。

次のような鮮やかな記述もある。

「つばめのおとずれは季節の風物詩だった。そして長くつめたい冬のあとに来る春が、野山にいっぱい花を咲かせながらまだどこかに油断のならない寒さをひきずっていたのとは違い、つばめのおとずれは、少しの曖昧さもなく夏の到来を告げる出来事でもあった。」

小説の主題は、妻女がひそかに好意を寄せているある武士が関わる上意討ちの顛末である。上意討ちが不首尾に終わったため、この武士は大阪の蔵屋敷に左遷されるだけでなく、ひそかに討手が放たれることになる。急遽役宅を明け渡すこの武士の様子を「だしぬけに巣を取り上げられたつばめのような」と妻女が思うところでこの小説は終わる。書き出しのツバメの巣の話と呼応して深い余韻を感じさせる。短編小説の技法の冴えである。

藤沢氏には「鶺鴒(みそさざい)」という名の短編小説もあって、ここではミソサザイの鳴き声が登場する。ミソサザイの鳴き声をそれと判別することはそう簡単ではないと思うが、氏は自信を持って聞き分けておられたようである。氏の作品にはほかにも野鳥の描写がさりげなく挿入されているものがあり、野鳥に造詣の深い数少ない作家だったといえそうである。

〒006-0851 札幌市手稲区星置1条6-8-1

## 根室地方の自然と野鳥

— 新年講演会から —

川崎 慎二

北海道の東のはずれにある根室半島。ここは同じ北海道の中でも、異質な自然環境が見られる地域です。夏でも冷涼な気候に支配されている当地に自生している植物たちは、その多くが亜寒帯に属するもので、日本では高山植物といわれているコケモモやガンコウラン、ハクサンチドリなどが、海拔0m地帯で見ることができます。なぜそれほど冷涼なのか。それは春から夏にかけて発生する「海霧」による日照不足＝気温の低下によるものです。根室半島の沖合いでは暖流と寒流がぶつかりあい、海上で海霧が発生しやすく、南よりの風により霧が陸地へと運ばれます。年間およそ3分の1が霧の日で、その多くがこの春から夏に集中するのです。これでは暖かい日差しを必要とする温帯系の植物はすむことができず、いわゆる高山植物の類がはばをきかせるわけです。これら亜寒帯の植物たちが形成する景観は、日本よりも北欧に近いといえます。特にミズゴケを基盤とした高層湿原では、アヤマや多数のラン科植物が見事なお花畑を作り、湿地につよいアカエゾマツが純林を形成し、異国情緒のある景観を呈しています。

根室にはこうした湿原のほか、トドマツやミズナラ、ダケカンバが優占する森、ハマナス群落のある海岸草原、広大なヨシ帯とそこを流れる自然河川、淡水と汽水の湖沼群、干潟、砂浜、岩礁など、実にバラエティに富んだ自然環境が、あまり大きな開発を受けない形で保存されています。多様な自然環境と冷涼な気候があいまって、この地域は海洋性から高山性まで300種類以上の野鳥が生息、観察できる、まさにバードウォッチングのメッカともいえるところなのです。

カモメが舞う空の下で、ルリビタキがさえずる。およそ本州では考えられない鳥たちの組み合わせが、ここでは普通なのです。関東で生まれ育った僕にとっては、それはたいへんショッキングな鳥類相でした。簡単に、しかも乱暴にいつてしまえば、関東あたりの海岸から山に至る標高差をぎゅーっとおしつぶして平地にしまったようなものでしょう。

300種類の野鳥の中には、絶滅の危機に瀕している野鳥

の多くが含まれています。それはシマフクロウ、タンチョウ、オジロワシ、クマゲラ、エトピリカなどで、いずれも広大で原始性のある「すみか」がないと生きながらえることのできない野鳥たちです。これらの野鳥も見ただけなら、おそらく他の場所でも可能でしょうが、繁殖している地域となるとかなり限定されてしまいます。上記すべての野鳥が、根室地方で繁殖しており、また他の地域と比べて個体数も多いという事実から、この地域の自然がいかに豊かであるかを物語っています。それでもかつての生息状況からすれば、かなり数は少ないといわざるをえません。特にシマフクロウについては、全道で推定100羽余りと極めて少なく、繁殖地のひとつである根室地方でも、河川周辺の開発による水の汚れや餌となる魚の減少など、人の手助けがないと生きることさえままならない状況にあります。こうした野鳥たちは、常に注目を集めますが、種の保全の観点から、個体数や生息環境が安定するまでは、そっと見守ってほしいと思います。

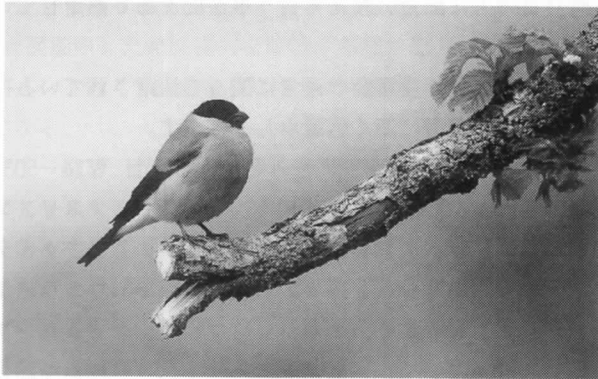


オオワシ

地盤が砂地だとはけっして思えないようなアカエゾマツの原始の森が広がっています。さらに湿原や干潟、海岸草原などがあり、根室地方に生息するほとんどの野鳥を、ここ一箇所で見ることができるといっても過言ではありません。春の干潟には、毎年ミヤコドリが美しい姿を見せ、年々その数が増えています。ほかにもホウロクシギやトウネン、コチドリなどのシギチドリ類が飛来しますが、春よりも8～10月の方が種類、数とも多く、ヘラシギなどの珍鳥も混じることがあります。

水域では、海上はカモメ類、ミズナギドリ類、カモ類などが見られ、秋の台風シーズンにはコアホウドリや数百羽のトウゾクカモメ類、ヒレアシギ類、ウミツバメ類が沿岸に押し寄せることがあります。湖沼ではガン、カモ、ハクチョウ類が見られ、春は3～4月、秋は10～11月がシ-





ウ ソ

ズンです。秋にはオオハクチョウやオナガガモ、ヒドリガモにコクガンが混じっていることもあります。そのほか、タンチョウ、オジロワシも見られます。湖が結氷する真冬には、氷上にオオワシ、オジロワシの数百羽の群れが集まります。いずれも国道ぞいにある道の駅を利用するとよいでしょう。森の中では、クマガラが通年生息し、春の繁殖期に入ることによく姿をみかけます。またカラ類のほか、冬にはイスカがマツの実をついばみにやってきます。森の縁にはノゴマ、湿原にはセンニュウ類、草原にはノビタキ、オオジュリンなどの小鳥類も生息しています。冬の海岸にはユキホオジロやハギマシコも毎年

飛来しています。春国岱の入り口附近には野鳥の会のレンジャーが常駐するネイチャーセンターがあり、最新の自然情報や歩く際の注意点などさまざまな情報を得ることができます。何をメインに観察したいかにより、訪れる季節を選ばないといけません、そこも現地のレンジャーに相談されるとよいでしょう。個人的には春の渡りの5月と真冬が気に入っています。

〒059-1365 苫小牧市植苗150-3

(財)日本野鳥の会ウトナイ湖サンクチュアリ



講演会風景



水鳥たちのオアシス・  
ウトナイ湖探鳥会に  
参加して

2002.11.10

畑山佳世

都会で生まれ育ち、自然や野生動物にはほとんど無縁の生活を送ってきた私が、縁あって北海道に嫁いできてぜひともこれを機会に北海道の大自然にふれたいと思ったのがこの探鳥会に参加したきっかけでした。

ウトナイ湖が野鳥の多く集まる場所でサンクチュアリと呼ばれていることは有名なので(また近所に住んでいることもあり)何度か足を運んだことはありました。ただ、野外観察の素人である私には、人なつこいオオハクチョウ、コハクチョウを見られるのが関の山でした。

そんな時、北海道ウォッチングガイドを見て、そうだとウオッチャー鳥見人のプロと一緒に普段見られない野鳥と出会えるかもしれない、と期待に胸ふくらませて探鳥会に参加しました。しかし素人の浅はかさで、湿地帯だというのに普通の運動靴でしかも薄着で出かけてしまいました。当日は晴れ

とは言え去年の11月に比べ寒く、集合地に着いた途端もっと厚着してくれば良かったと後悔しました。

寒さに震えながらも、野鳥愛護会の皆様に親切に野鳥の居場所を教えて頂くうちに、普段見つけられない鳥達の存在にひきこまれていきました。

「ああそこにオジロワシがいるよ。」

という声を聴き、大きな望遠鏡を覗かせてもらいましたが、私には見つけることができませんでした。残念。

湖岸に沿った木道を歩きながら、今度はヒシクイの群れを教えてくださいました。ウトナイ湖入口にある立て看板の絵でしか見たことがなかったので、とても感激!!しました。岸辺に群がるハクチョウたちと違って少し奥まった所にいるのだと分かりました。

そこからさらに進んだところで皆さんが望遠鏡を置いてじっくり観察しているので、覗かせてもらったところキンクロハジロ、スズガモ、ホシハジロ、ミコアイサ等が、湖の真ん中の水の上でゆったり休んでいました。

昼近くにサンクチュアリセンターに着き、皆でトリアワセ(今日見つけた野鳥を確認)をしました。実を言うと寒さにガマンできず、皆さんより一足早くセンターに避難していたのですが、ここでは窓からエサ台にヒマワリの実を食べに来るシマリスやカラ類(シジュウカラ?ハシブトガ

ラかな?)にも出会えて嬉しかったです。

この次は防寒具も長靴も持って万全の態勢で参加しようと思えます。参加させて頂きありがとうございました。今度は、小樽港の探鳥会に参加したいです。

〒059-1364 苫小牧市沼ノ端644番地11 A号

【記録された鳥】 ミミカイツブリ、ハジロカイツブリ、トビ、オジロワシ、チュウヒ、ノスリ、コブハクチョウ、オオハクチョウ、コハクチョウ、ヒシクイ、マガン、ヒドリガモ、アメリカヒドリ、ヨシガモ、オカヨシガモ、コガモ、マガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、スズガモ、ホオジロガモ、ミコアイサ、カワアイサ、オオセグロカモメ、ユリカモメ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、エナガ、ハシブトガラ、シジュウカラ、カワラヒワ、マヒワ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス

以上 37種

【参加者】 赤沼礼子、板田孝弘、井上公雄、今泉秀吉、大塚永利子、岡田幹夫、荻野裕子、川東保憲・知子、蒲澤鉄太郎・則子、川村宣子、北山政人、栗林宏三、後藤義民、小堀煌治、小山久一、佐藤幸典、島田芳郎・陽子、白澤昌彦、高栗 勇、高橋良直、竹中宏二、谷口勇五郎、戸津高保・以知子、成澤里美、畑山 健・佳世、松原寛直・敏子、山口和夫、山田良造、横山加奈子、鷲田善幸 以上 36名

【担当幹事】 戸津高保、北山政人

## 野幌森林公園

2002.12.1 香川 稔

師走に入って最初の日曜日、探鳥会に参加した。12月とは思えない小春日和。今年最後の例会に40人位の愛好者の長い列が続いた。園内は見通しも良く積雪も無く絶好の探鳥日和となった。時折りヒヨドリやカラ類の声はするが冬鳥のツグミなどの群れは見えない。昨今は愛護会の各探鳥地でも野鳥の数の減少が夏鳥も含めて目立っています。結氷している大沢の池は日射しでガサガサと音を立て割れていた。ハイタカが三度頭上を旋回していた。大沢園地では例会の時に昼食や休憩で長く親しんだあづまやが解体されていた。昔あづまやの近くの崖でカワセミが営巣していた。観察中近くの古木で初めてアカショウビンを見た。其の木も危険木なのか伐採されていた。桂コースに入って先頭集団の一人が合図している。近づくときマゲラの出現だ。11月に入って二度見ていたので期待していた。今日のは遠く他の木の枝が邪魔して見にくい全員が見る事が出来たと思えます。冬の野幌での人気はフクロウとクマゲラです。間もなく厳冬期、餌の確保も大変だが無事に春を迎えてほしい。私も入会して16年位になりますが最近では例会に参加する回数も減り会のお手伝いもせず心苦しい次第です。春と秋一人で石狩方面に出掛けてシギ類の識別に迷って

る時会員の方に出会い教えて貰う事が度々あり感謝しています。

此の機会に長く愛護会の運営に関して活躍されている役員の皆様のご苦勞に深く感謝申し上げます。

〒004-0013 札幌市厚別区もみじ台西2丁目 W14-503

【記録された鳥】 トビ、ハイタカ、オオタカ、ノスリ、コゲラ、アカゲラ、クマゲラ、ヒヨドリ、ツグミ、キクイタダキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、マヒワ、ウソ、ハシブトガラス 以上 20種

【参加者】 板田孝弘、井上公雄、今泉秀吉、今村三枝子、大表順子、大槻日出、岡田幹夫、荻野裕子、尾崎 脩、香川 稔、川東保憲・知子、久志本アイ、後藤義民、小西美枝、小林 恵・明日香、小堀煌治、佐々木英典、佐々木貴紀、佐々木 裕、白澤昌彦・瑠美子、須田 節、田口、高嶋則子、高橋良直、道場 優、戸津高保、長尾由美子、中正憲信・弘子、浪田良三、成澤里美、樋口孝城・陽子、辺見敦子、松原寛直、三浦とも子、村上トヨ、山川美香、山口和夫、山田良造、横山加奈子、吉田慶子 以上 45名

【担当幹事】 成澤里美、岡田幹夫

## 小樽港探鳥会に参加して

2003. 1.15 白澤昌彦

小樽に向かう列車から見る海岸は、普通の降雪が列車のスピードにより、吹雪模様に見え、今日の探鳥会の厳しさを思いやられる。例年、本探鳥会の参加者は日本野鳥の会小樽支部を含め概ね70名くらいなのに、今回は46名と非常に少なく、このためバス料金も例年よりも高い値段になりました。

小雪がちらつく中、まずは日和山灯台へ。いつもの場所は強い風と小雪で観察しづらい中、「オオワシ」という声が上がると後方に肩羽や尾羽の白がはっきりみえるオオワシの飛翔を確認。しばらく観察した後、風を避けて灯台の裏側に移動。ヒメウの群れが見られる中、ウミガラス、ハシブトウミガラス、ウミスズメといった声が聞こえてくる。その後、祝津漁港でカモメの勉強、シロカモメとワシカモメの区別、ワシカモメとセグロカモメの識別を楽しみながら観察。高島・北浜岸壁等の埠頭でシノリガモの群れやウミアイサ、ハジロカイツブリを見たが、カンムリカイツブリは細かい雪が視界を遮り、残念ながら見る事ができなかった。午後から貯木場へ。海面全体が氷結して雪が乗っており、かすかな波で表面がゆらいでおり、遠くにみえるキンクロハジロなどのカモ類は少なかった。午前中の岸壁での観察ではホオジロガモの群れを見る事ができなかったが、最後の観察場所の埠頭で多数のホオジロカモをバスの陰から静かに観察する事ができた。このとき背後にツ

グミヤレンジャクが現れ、皆はそちらを観察、私はまた海側にてハギマシコ探し、やっとのことで飼料袋らしきものが置いてある地面にスズメと一緒にいるのをみつけ、その後、皆さんで18羽ほどの個体を確認する。上空にオジロワシが悠然と飛翔してきた。オジロワシはこの日、木に止まっている個体も見ている。小樽の楽しみの一つはやはりホオジロガモの群れとその美しさです。今年もじっくり間近に見れました。解散のため小樽駅に向かうバスが信号で止まったときに、目の前のナナカマドの木にアトリが採餌している姿が見られ、後半終了間際の鳥の出現サービスに皆さん満足したことと思います。

〒064-0917 札幌市中央区南17条西18丁目2-20

【記録された鳥】アカエリカイツブリ、ハジロカイツブリ、カンムリカイツブリ、ウミウ、ヒメウ、トビ、オジロワシ、オオワシ、マガモ、キンクロハジロ、スズガモ、シノリガ

モ、ホオジロガモ、ウミアイサ、ウミネコ、カモメ、オオセグロカモメ、シロカモメ、ワシカモメ、ハシブトウミガラス、ウミガラス、ウミスズメ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、キレンジャク、ヒレンジャク、ツグミ、アトリ、ハギマシコ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト

以上 34種

【参加者】井上公雄、岡田幹夫、萩野裕子、加藤千春、亀井厚子、岸谷恵美子、北山政人、栗林宏三、佐藤幸典、品川睦生、島田芳郎・陽子、清水朋子、白澤昌彦、高栗 勇、高橋良直、田中志司子、戸津高保・以知子、中正憲信・弘子、成澤里美、原 美保、三浦美重子、村上トヨ、山形裕規、山口和夫、山本昌子、雪田昭治・久子、横山加奈子、山本雅晴、柳川 巖

以上 33名

【担当幹事】梅木賢俊、中正憲信、白澤昌彦

## 鳥民だより

### ●総会のご案内

日 時：平成15年4月12日(土) 午後6時  
場 所：札幌市市民会館 第7会議室  
多数ご参加下さい。

### ●野鳥写真展開催と写真募集のお知らせ

#### <野鳥写真展>

日 時：平成15年5月7日(水)～5月20日(火)  
場 所：光映堂2階ギャラリー「ウエストフォー」  
札幌市中央区大通西4丁目  
TEL 011-261-0101

展示作業は6日午後5時30分から、撤去作業は20日午後5時30分から行います。お手すきの方、ご協力願います。

#### <写真募集>

写真は原則、道内で撮影したものでサイズは四ツ切り、デジタル写真はA4版。鳥の名前、撮影者、撮影場所を添付して下さい。送付先は上記光映堂の小林さんまで。6日に直接現地に持参する場合は事前に連絡をお願いします。

今年から作品一点につき一枚の商品券(1,000円)を差し上げます。商品券は光映堂本店、地下街店で使えます。問い合わせは小堀まで。

TEL 011-591-2836 (19時～22時まで)

### ●会費納入についてのお知らせ

日頃ご協力を賜り有り難うございます。毎年6月の野鳥だより発送の時に郵便振替用紙を同封し、納入方

ご案内しておりましたが、郵便料の関係で、今年から3月の野鳥だより発送の時に、探鳥案内と併せて送りますので、よろしくお祈いします。

また郵便振替用紙で会費納入の際、通信欄に野鳥に関するニュース等を記載していただければ、愛護会のホームページの伝言板で皆さんにお知らせしたいと思います。

●平成15年度からは「野幌森林公園を歩きましょう」がすべて「探鳥会」になる予定です。経緯などについては次号でお知らせします。

### ☆☆☆会 員 名 簿 ☆☆☆

#### 【新しく会員になられた方】

徳田 恵美 〒069-0852  
和美 江別市大麻東町24-9  
美弥子  
裕  
盛田 徹 〒053-0842  
苫小牧市有珠の沢5-13-12  
中島 和治 〒079-0463  
滝川市江部乙町東10丁目835-7  
篠原 盛雄 〒052-0021  
伊達市末永町97-38  
先崎 啓究 〒061-1142  
北広島市若葉町3-4-1  
山本 和昭 〒069-2373  
岩見沢市幌向南3-3  
山本 雅晴 〒063-0843  
札幌市西区八軒3条5丁目2-27-33



- ☆探鳥会は、探鳥幹事を中心に行います。
- ☆余程の悪天候でない限り行います。
- ☆公共交通機関を利用される方は各自でお確かめください。
- ☆昼食、雨具、観察用具、筆記用具をお持ちください。
- ☆探鳥会の問い合わせ

(社)北海道自然保護協会 ☎011-251-5465 午前10時～午後4時(土・日・祭日を除く)

4月13日(日)	野幌森林公園	大沢口駐車場入口 午前9時集合
	新札幌駅発 夕鉄バス(文京通西行 大沢公園入口下車) JRバス(文京台循環線 文京台南町下車) 徒歩5分 残雪もある公園内は春の訪れを感じさせる花たちも。さえずり、ドラミングを聞きながら。長靴・防寒。	
4月20日(日)	宮島沼	大富会館裏 湖畔前 午前10時集合
	JR岩見沢駅前バスターミナル発 中央バス(月形行) 大富農協前下車 徒歩10分 マガンたちは北帰行の途中です。沼の雪融けがマガンの大群を誘い、壮観な春の風物詩に感動します。	
5月3日(土)	藤の沢	白鳥園 午前9時集合
	定鉄バス(定山溪線) 藤野3条2丁目下車 徒歩15分 春の息吹を感じつつ白鳥園の裏山(藤野マナスル)をゆっくり散策しながら探鳥します。	
5月4日(日)	野幌森林公園	大沢口駐車場入口 午前9時集合
	新札幌駅発 夕鉄バス(文京通西行 大沢公園入口下車) JRバス(文京台循環線 文京台南町下車) 徒歩5分 新緑がさわやかな季節です。ミズバショウも盛りです。キビタキ・オオルリを探しながら歩きます。	
5月11日(日)	千歳川周辺早朝探鳥会	孵化場手前橋付近 河川敷小公園 午前5時集合
	(早朝のため公共交通機関はありません。自家用車相乗りのご相談は幹事まで連絡を) 朝食・防寒装備。 千歳川沿いの道は豊かな自然の宝庫。去年は40種を観察し、ヤマセミも現れました。	
5月18日(日)	鶴川河口	JR日高本線 鶴川駅前 午前9時30分集合
	道南バス 鶴川農協前下車 徒歩5分 近年、シギ・チドリ記録は少なくなりました。去年はコチドリが繁殖していたとか。	
5月25日(日)	野幌森林公園	大沢口駐車場入口 午前9時集合
	新札幌駅発 夕鉄バス(文京通西行 大沢公園入口下車) JRバス(文京台循環線 文京台南町下車) 徒歩5分 新緑の公園は春の息吹に満ちています。夏鳥たちの勢揃いの季節です。さえずりであふれそう。	
6月1日(日)	植苗ウトナイ	JR千歳線 植苗駅前 午前9時10分集合
	JR千歳線 植苗駅下車 草原・原野の鳥たちに会えます。オオジシギの懐かしい鳴き声と羽音、ノゴマ、コヨシキリのさえずり…。	
6月7~8日(土・日)	大沼公園など	別掲
	道南の鳥一泊探鳥会(定員50名、貸切バス利用、募集要項は本文参照のこと) お目当てのあの赤い鳥はいるでしょうか。キョロロロロロ…出会いたいですね。	
6月14日(土)	平和の滝 夜の探鳥会	平和の滝駐車場 午後6時30分集合
	琴似バスターミナル発 市バス(西野平和線) 平和の滝入口下車 徒歩20分 夜の探鳥会ではツツドリ、ヨタカ、コノハズクなどの声を聞くことができます。懐中電灯を忘れずに。	
6月15日(日)	東米里	東米里小学校正門前 午前9時集合
	市バス(米里線) 東米里小学校前下車 カッコウの声が初夏の草原に響き渡り、コヨシキリ、オオヨシキリもさえずってくれます。	
6月22日(日)	野幌森林公園	大沢口駐車場入口 午前9時集合
	新札幌駅発 夕鉄バス(文京通西行 大沢公園入口下車) JRバス(文京台循環線 文京台南町下車) 徒歩5分 鳥たちの巣作りの季節、エサを運ぶ鳥たちを観察できます。野幌にはまだたくさんの自然が残っています。	

[北海道野鳥愛護会] 年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より) 郵便振替 02710-5-18287  
〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・六階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465  
HPのアドレス <http://homepage2.nifty.com/aigokai/>